

上津土墨跡

久留米市文化財調査報告書

第 48 集

1986

久留米市教育委員会

序 文

久留米市教育委員会では、昭和59年12月、上津町所在の上津土壘と仮称されていた遺構の発掘調査を実施しましたが、この土壘状遺構は、人工の盛土で版築技法が用いられていること等が判明しました。又、明治時代に大石が出土したとか、土壘の東側に溜池があったという古老の話等々からして、大宰府の水城と同様な古代の防墾跡ではないかと推測されるに至りました。そこで、昭和60年度は、特に東側にあったと思われる掘跡を確認するため調査を実施したところあります。その結果、予想通りの掘跡が検出され、規模・構造等からしても大宰府防衛のための水城にはほぼ間違いないものとの結論に達し、今後色々検討を要するものの、わが古代史解明の上で、貴重な資料を得ることができました。これも、地権者の方々をはじめ、関係各位の御指導、御協力の賜と深く感謝いたします。

本書が文化財保護の啓発・普及の一助となり、あわせて郷土の歴史解明に資するところがあれば幸いです。

昭和61年3月31日

久留米市教育委員会

教育長 光山利雄

例 言

1. 本書は、久留米市教育委員会が国・県の補助を受け、昭和60年度に実施した市内上津町所在の上津土壘跡の発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は久留米市教育委員会文化部文化財担当調査係の松村一良（第1・2次）・古賀正美（第1次）・富永直樹（第2次）が担当し、実測図作成は文化財担当の櫻井康治・大石昇・萩原裕房・立石雅文・近澤康治・園井正隆がこれにあたった。
3. 調査にあたっては、横山浩一・西谷正・山本輝雄・沢村仁・佐田茂・小田富士雄・渡辺正氣・石松好雄・齋久嗣郎・宮小路賀宏・栗原利彦・河原純之・長洋一・田中正日子・田村圓澄諸先生の御指導、助言を得た。記して謝意を表したい。
4. 本書の執筆はⅡを古賀正美が担当し、他は松村が担当した。
5. 本書の編集は松村が担当した。

I. はじめに

上津土墨跡は戦後までその大部分が墓地として利用されており、地元では土墨跡南方の本山丘陵の北麓に営まれている墓地を新墓（しんばか）と呼ぶのに対して、古墓（ふるばか）と呼び習わしている。これは古墓が古く江戸時代以来の墓所として営まれ続けているための呼称とみられる。しかし、その後、この古墓と呼ばれる墓地は大部分が改葬され、造成した後に納骨堂敷地となっている。さらに昭和52年になると、墓地改葬後もなお高さ約2m・幅約20m・長さ約45mにわたって土手状の高まりとなって遺存していた、通称「キレメ」の土墨跡も蓮の池公園の造成工事により、完全に削平されてしまった。

昭和59年、市教育委員会では、市消防局による蓮の池公園内の防火用水槽埋設工事に先立つて、市費による発掘調査を実施した(第1次調査)。調査の結果、地上部分は完全に削平を受けていたものの、地下部分は一部を除き、比較的良好な状態で遺存していることが明らかになった。また、確証を欠くものの、出土遺物等の検討からこの土墨は古代の築造である可能性が強まった。

一方、この調査に並行して、地元古老等に対してこの土墨に関する聴取り調査を実施した結果、むかし土墨の東側に溜池があったらしいこと、戦前、土墨北端の浦山丘陵部との接合部で、道路工事の際に大石群が出土したこと、また、この大石群は東側溜池の水門の石であるということなど、幾つかの興味深い知見を得ることができた。そこで市教育委員会では、土墨東側にあったという溜池が大宰府の水城の場合と同様、外堀の存在を意味している可能性が強いため、これを確認する目的で昭和60年度、国・県の補助を得て、土墨東側の水田部分の発掘調査を実施した。調査地点は、久留米市上津町1633—2他である。発掘調査は昭和60年12月9日に開始し、翌年1月9日に終了した。



調査地遠景（東から）

II. 位置と環境

上津町は久留米市と八女郡広川町と接し、律令郡制の範囲では御井郡に属している。上津土墨跡はこの町のほぼ中央にあり、所在地は久留米市上津町字東上村・馬場・亥ノ子角・平野一帯である。上津町東方の明星山（362.5m）、飛岳（223.6m）から西にのびる二つの丘陵、本山丘陵と浦山丘陵の西端部にこの谷を遮断するかのように南北方向に土墨が築かれている。この谷には古代の道路（藤山道）が通り現在は国道3号線が通るなど、交通の要地でもある。

土墨は現在、宅地・公園・納骨堂の建設等によって大幅な削平をうけ、一部にわずかな土手状の高まりを残すのみである。調査の成果によれば土墨跡の標高は23m程であるが、本来は土墨幅約20m・高さは5m以上・長さは約450mと推定されている。また、浦山丘陵から上津荒木川までは版築技法による盛土、上津荒木川以南は本山丘陵の地山削り出しによって築いていたようである。この土墨について文献はほとんどない。『筑後將士軍談』に「里老伝へ云ク昔、高良明神往返ノ古道ナリト」あり、本山丘陵に鎮座する豊姫社と高良社との関係をうかがわせるが、中世にはこの土墨は神が通る、神がつくった道として理解されていたことをしめすものであろう。しかし、文献による追求はこれ以上は困難であり、考古学的なアプローチ以外には有効な方法はないようである。

土墨周辺の遺跡に目を転じると、この地区には古墳時代の遺跡が顯著であることが知られ、様々な問題を投げかけている。5・6世紀の主要な古墳として甲塚古墳・石櫃山古墳・浦山古墳・本山古墳などがあげられる。同時代の遺跡としては6世紀後半の掘立柱建物・竪穴住居が検出された平野遺跡や池田・平野両窯跡などの古墳時代後期の須恵器窯跡もある。

甲塚古墳は浦山・本山両丘陵が形成した谷の奥まった地点、飛岳の西麓の標高60mの位置にある前方後円墳である。墳丘全長は約75m・後円部径約57mある。内部主体は竪穴式石室を有すると言われるが詳細は不明。帆立貝式前方後円墳で埴輪をもつことなどから5世紀代のもので、浦山古墳より先行すると思われる。

石櫃山古墳は浦山古墳の東0.8kmにあった前方後円墳で、内部主体は横口式石棺である。墳長100~115m・後円部径約70m程の規模をもち浦山古墳よりやや先行すると考えられている。

浦山古墳は浦山丘陵の先端にあり、土墨を見おろすような位置にある。全長約60m・後円部径40mある前方後円墳で浦山古墳群の盟主的位置をしめている。主体部は横穴式石室に妻入横口式石棺が安置され、石棺屋根には4個の環状縄掛突起、内壁には直弧・同心円文が線刻されている。埴輪・葺石なども検出されている。石棺の構造・墳形などの特徴から5世紀後半の築造とされている。

本山古墳は浦山丘陵と相対する本山丘陵の西端に位置し、本山古墳群中の最大の規模を有している。墳丘が一部削られているため墳形を決定することは困難であるが、埴輪がめぐること、

径40m以上に及ぶ盛土がなされていることなどから前方後円墳の可能性が極めて強い古墳である。採集された形象・円筒埴輪や須恵器などから6世紀代の築造と推定されている。

また、この谷には『日本書紀』景行天皇紀に九州巡幸の道筋としてあらわれる「藤山」の地が、上津土墨の東方にある。筑紫君の本拠八女県から高良台丘陵を抜けて藤山に至る古代の道があったと推測されている。この道路にそって甲塚古墳・浦山古墳がみられることは、この道の成立時期をうかがわせ、更に、この地域に5世紀代の有力首長の存在を考えることができる。

この前方後円墳の系列は甲塚古墳・石櫃山古墳・浦山古墳一本山古墳の順にたどれるが、5世紀代の古墳に比して6世紀のそれが数少ないことは注意される。生葉・八女・三毛地方の古墳群が6世紀後半まで主要な古墳の系譜がたどれるのに対して、この上津地区の古墳は5世紀代は系譜がたどれるが、本山古墳の詳細が不明な点もあって、6世紀後半まではたどれないようである。この空白期は527年の磐井の反乱をめぐる畿内政権と筑紫政権との対立の結果が、この地の首長層の動向に反映しているのではないかと思われる。磐井の反乱の戦場が御井郡であったという『日本書紀』の記載を以上のように理解したいのである。奈良時代、筑後国府が御井郡に置かれたことは、この事に遠因するのではないか。磐井が新羅と結び戦かったということは、この戦争を東アジア世界の動向の中で考えなければならないことを示していよう。

九州が再び東アジア世界の政治的緊張の中で最前線の地となるのは7世紀中頃のことである。唐の高宗の東方政策がこの頃、征服政策に転換し、唐・新羅・百濟・倭の対立の形をとり、最終的結着は、633年白村江において唐・新羅連合軍に倭軍が大敗北を蒙ることによって決定的になる。倭はこれを契機として朝鮮には一切の足場を失い、翌664年には唐の政治的軍事的圧迫の中で、対馬・壱岐・筑紫に防人、烽を配し、大宰府に水城を築いている。翌年には大野・櫟城を築き大宰府を固めている。

この戦いには筑紫君薩夜麻、上陽咩（上妻）郡の大伴部博麻（持統紀4年条）、山門郡の許勢部形見（統紀神護慶雲4年条）などが参加しており、百濟の役には筑紫の兵が多かったことが推測される。敗北後の厳しい国内外の緊張の中で、この上津土墨の築造も理解されるべきであろう。

参考文献

福岡県教育委員会『石櫃山古墳』福岡県文化財調査報告書第41集 1969

森貞次郎 「浦山古墳」（小林行雄編『装飾古墳』 平凡社 1964）

佐田茂 「筑後地方における古墳の動向」（鐘山猛先生古稀記念『古文化論叢』 1980）

萩原裕房 「古墳時代 主要な遺跡と遺物」『久留米市史』第1巻 1981

吉田晶 「古代国家の形成」（岩波歴史講座『日本歴史』古代2 1975）

井上光貞 「大化革新と東アジア」（岩波歴史講座『日本歴史』古代2 1975）

矢野一貞 『筑後將士軍談』



- | | | |
|----------|------------|---------------|
| 1. 上津土塁跡 | 5. ホイト池瓦窯跡 | 9. 平野遺跡 |
| 2. 浦山古墳 | 6. 甲塚古墳 | 10. 平野窯跡 |
| 3. 石櫃山古墳 | 7. 極楽寺古墳群 | 11. 御井・上妻郡界標石 |
| 4. 池田窯跡 | 8. 本山古墳 | 12. ひょうたん山古墳群 |

第1図 周辺遺跡分布図（1/2.5万）

III. 土墨の調査

発掘調査は、本遺跡が削平を受けた土墨状遺構という性格上、土層断面の観察に主眼をおいてトレンチ調査に拘った。しかし、調査地が児童公園・畑地であるため、各種遊戯施設・野菜作付け等の関係上、トレンチ設定場所・規模などに制約を受けざるを得なかった。以下トレンチ調査区毎に記述する。



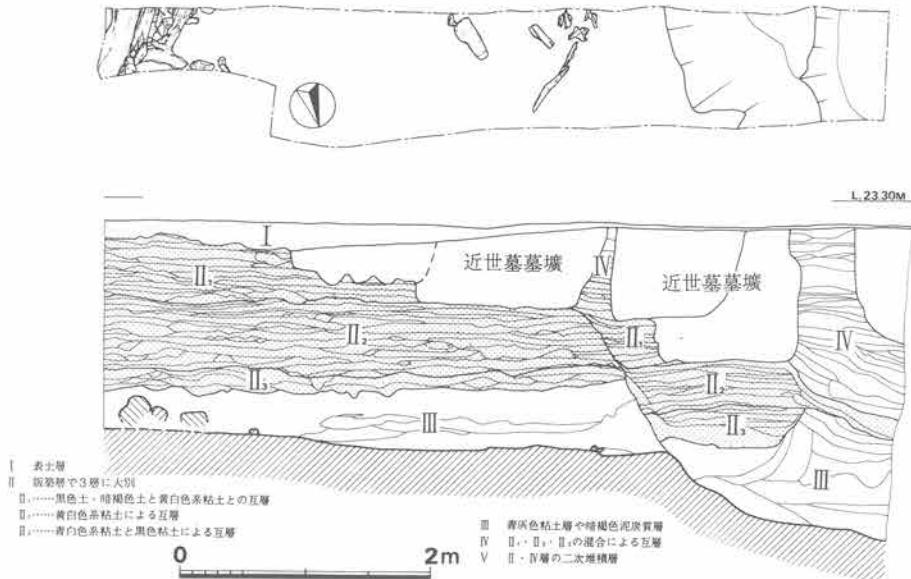
第2図 上津土墨跡トレンチ位置図 (1 / 800)

第1トレンチ (T-1)

児童公園の北辺に設定した、幅1.5m・長さ6mの東西トンンチで、人力による掘下げを行なった。現表土である砂層（厚さ3～15cm）を取除くと、T-1東辺部では直接、黒色土・暗褐色と白色系粘土層の互層となった版築層に移る。一方、T-1中央から西辺部にかけてはケーブル埋設溝や近世墓等による攪乱が著しい。T-1の層序は次のとおりである。



第1トレンチ全景 (西から)



第3図 第1トレンチ実測図 (1 / 60)



第1トレンチ南壁東半部（北から）



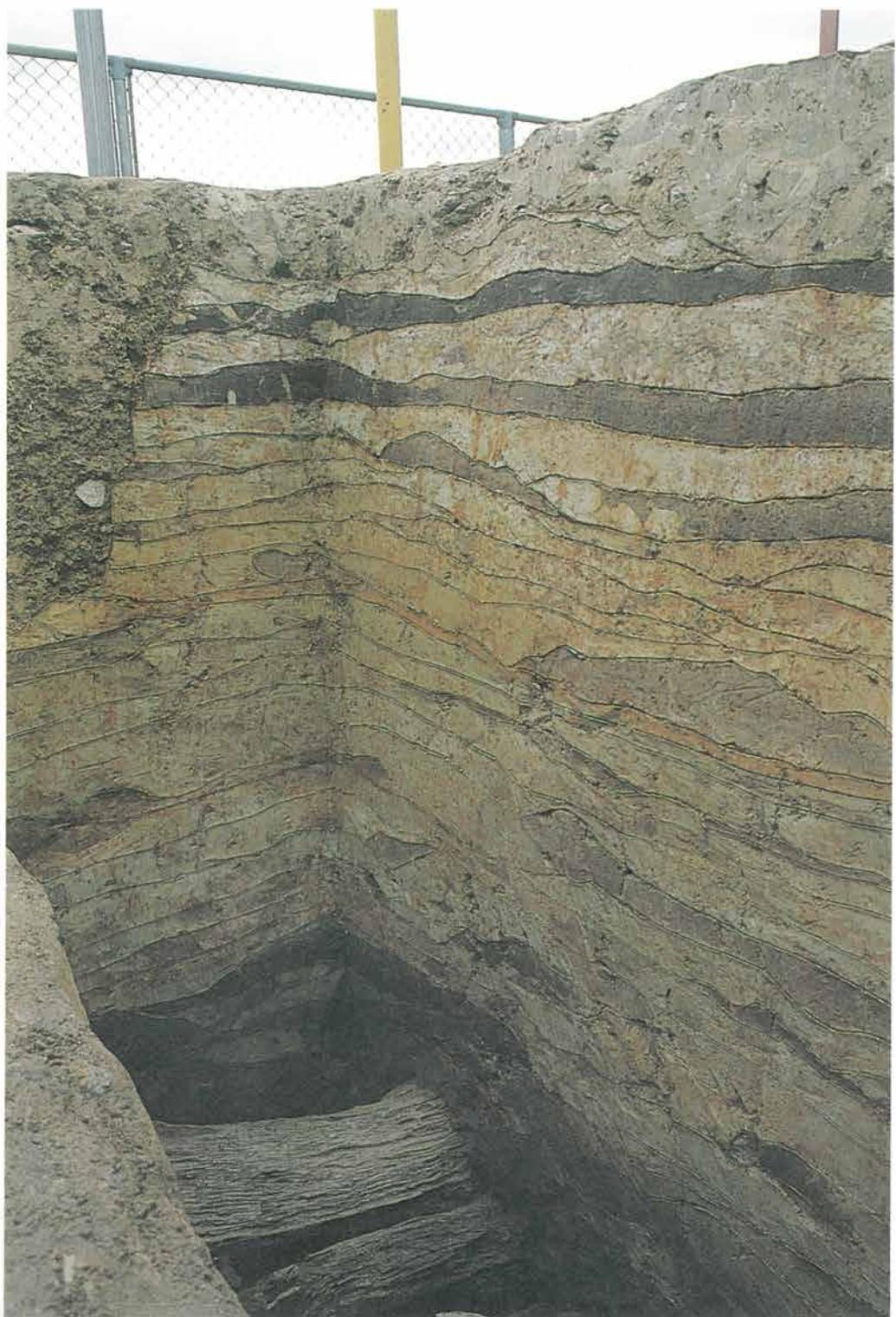
第1トレンチ南壁西半部（北から）

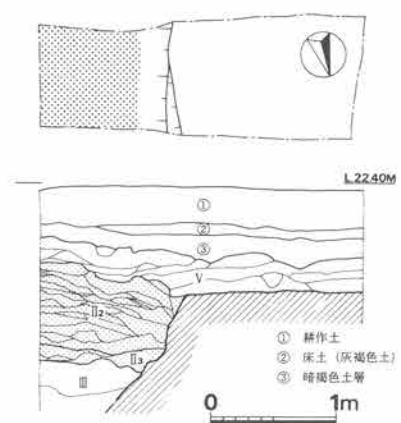
I層は現表土及び近世墓等による擾乱層である。II層は版築層で、使用された土の違いにより大きく3つに分類できる。II₁層は黒色土、暗褐色土と白色層による互層、II₂層は黄白色系粘土による互層、II₃層は青白色系粘土と黒色粘質土との互層である。II₁層は非常に堅緻で、締まっており、II₂・II₃の版築層の締まりとは各段の差が認められる。II₂層は層間の汚れにより版築層であることを確認した。II₁層最上部は鉄分の沈着のため橙黄色を呈する。III層は青灰色粘土層や暗褐色泥炭質層からなり、自然木や枝葉、木の実（ドングリ）などを多量に含んでいる。以下地山である砂層に達するが、T-1の地山面は西半部で大きく摺鉢状に落込んでいる。また土層も地山変換点で大きく摺鉢状の落込みに向ってずれを生じている。T-1西半部の層序はII₁・II₂・II₃層いずれも約50cmほど落込み内にずれ込んでいる。また、これらの上部には黄白色粘土・黒色土・暗褐色土などを粒状にして版築を行なっているIV層が覆っている。以上がT-1の基本層序である。なお、II₂層最上面の鉄分沈着層のレベルは、周辺の現地表面のそれとほぼ一致する。II層中から数点の土師器片が出土したが、時期決定の確証に欠ける。

第2トレンチ（T-2）

版築層の西端部を確認するため、児童公園西側の畠地に幅1m・長さ2.5mの東西トレンチを設定した。T-2地点の標高はT-1地点に比べ約1m低い。

T-2地点では表土下約80cmで地山に達するが、トレンチ東辺寄りにおいて、地山の落込みを





第4図 第2トレンチ実測図 (1 / 60)



第2トレンチ全影（西から）

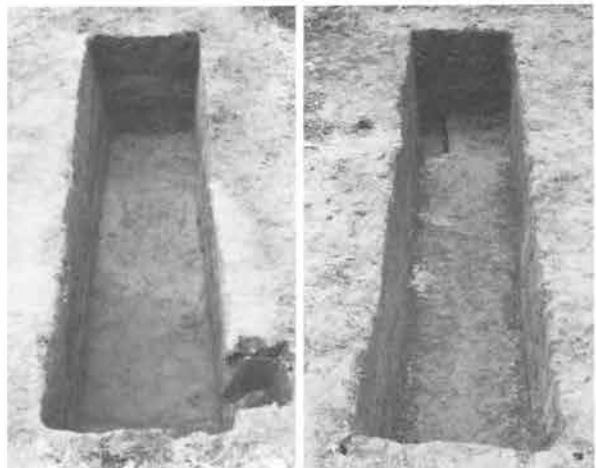
検出した。T-2の層序は上部から表土・耕作土、灰褐色土層、版築層の二次堆積とみられる第VI層の順で地山に達する。地山の落込み内はT-1におけるII₂・II₃・III層が認められる。III層には、枝・葉・草などが多量に含まれる。出土遺物としては第V層から須恵器杯蓋（第8図2）が出土した。

第3トレンチ (T-3)

土墨本体の版築層の西端を確認するため、T-2に先立って掘下げた幅1m、長さ4mの東西トレンチである。層序は、表土・耕作土、灰褐色土層、暗褐色土層、淡褐色砂質層を経て地山に至る。版築層は認められない。

第4トレンチ (T-4)

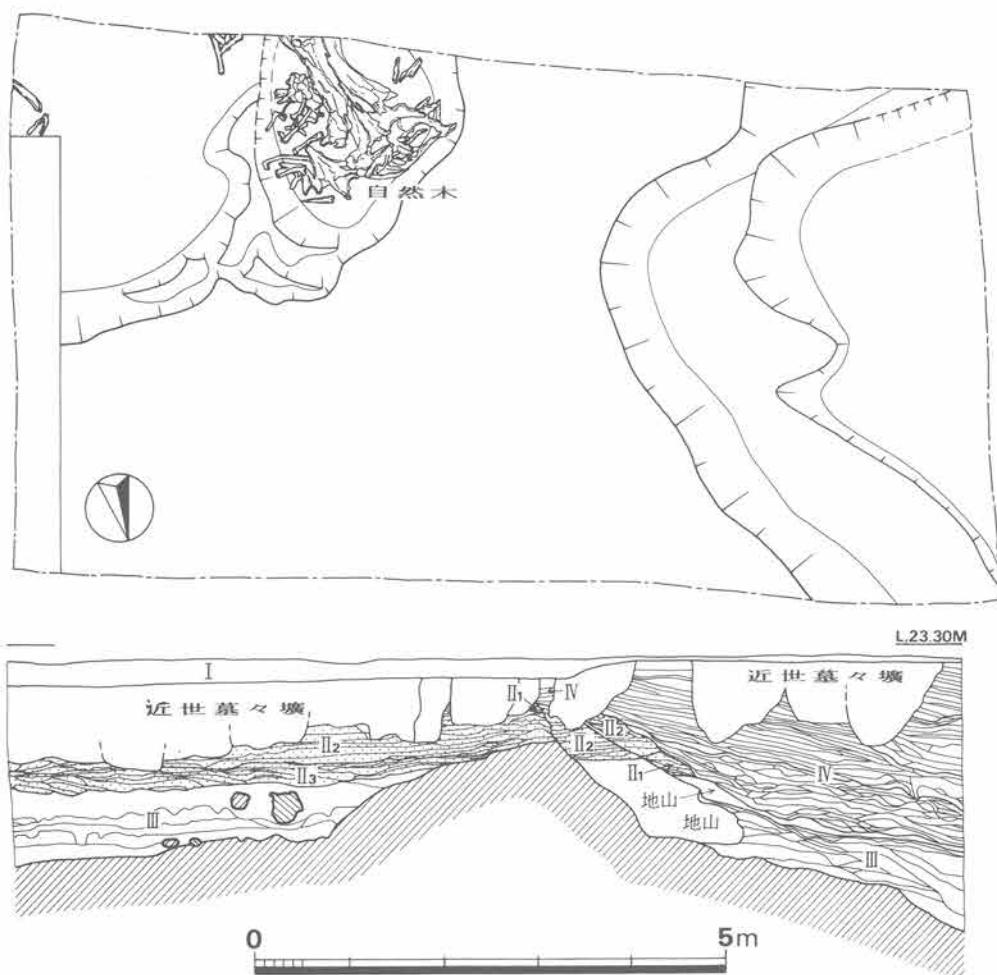
児童公園西側の畑に設定した幅1m・長さ5mの東西トレンチである。表土・耕作土以下約灰褐色土層、暗褐色土層、黒褐色土層、黄褐色粘土混じり、灰褐色砂質層を経て地山に至る。地山までの深さは約70cmを測る。



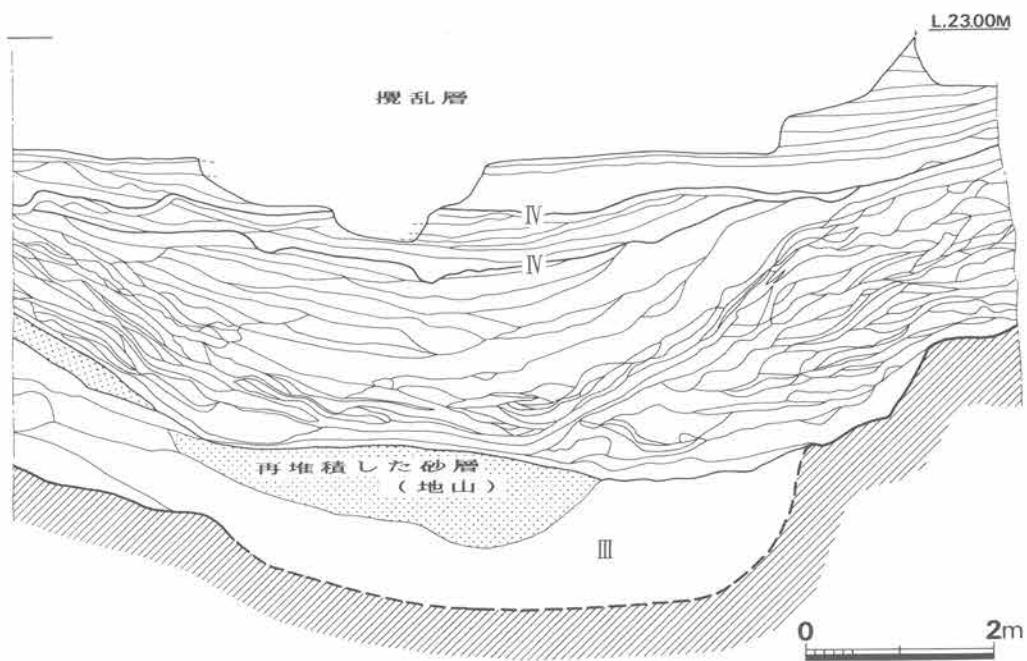
第3トレンチ全景（東から） 第4トレンチ全景（東から）

本調査区

防火用水漕埋設工事と並行して発掘調査を実施した、東西約10.5m・南北約5.5mの調査区である。調査区全域にわたって近世墓が錯綜しているため、重機による掘下げを実施し、土層観察を行なった。第5図は本調査区の平面及び南壁土層断面図である。基本的な層序はT-1のそれとほとんど変化はないが、近世墓々塚による攪乱が著しいため、Ⅱ₁層はほとんど認められない。南壁土層断面図によれば、南壁中央部付近に地山の盛上がりが認められる。東半部はⅡ₂層・Ⅲ₂層・Ⅲ₃層を経て地山に達しているが、Ⅲ₂層中に横倒しとなった自然木（樺）の基部を検出した。倒れた方向・距離などからT-1の自然木と同一の樺とみられる。一方、西半部では、Ⅲ₂層は西壁寄りで検出した摺鉢状の落込みに向って滑り落ちており、2ヶ所にわたって土層の不整合面が観察される。また、西壁寄りに検出した摺鉢状の落込みは、最深部で現地表から約3.2mを測る。西壁断面ではⅠ層下には厚くⅣ層が認められ、代ってⅡ層は全く認められない。Ⅳ層下にはⅢ₂層とした暗青灰色粘土層・暗褐色粘土層・黒色粘土層・砂層（再堆積した地山層）などが堆積しそれぞれの層間に草などの植物質を挟入している。



第5図 本調査区実測図 (1 / 80)



第6図 本調査区西壁土層図



本調査区全景（東から）



本調査区南壁東半部（北から）



本調査区南壁西半部（北から）

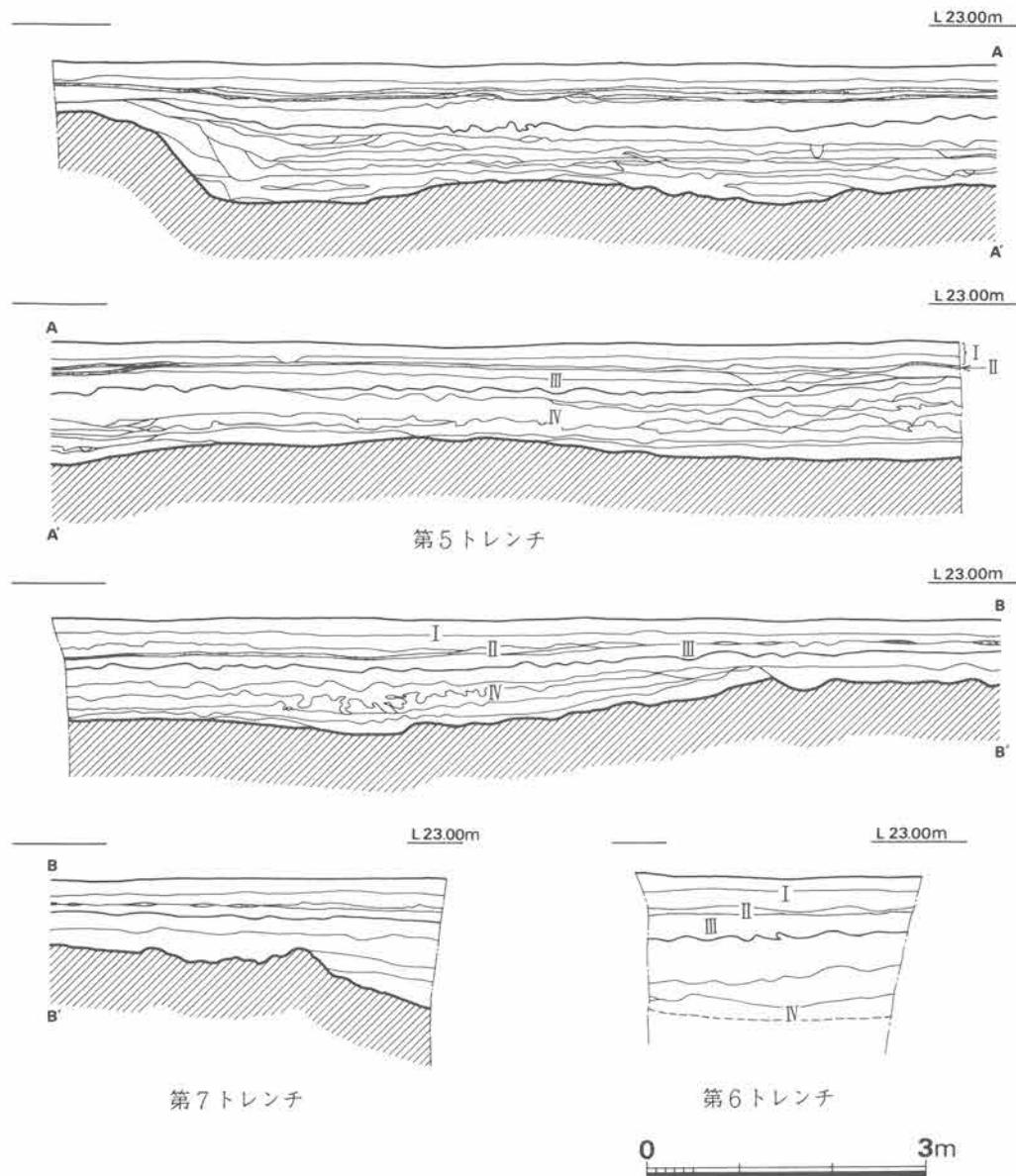


IV層々間の植物質

第5～7トレンチ (T-5～T-7)

地元に伝わる「溜池」伝承から土墨東側の水田地帯に堀等が埋没している可能性が強いため、これを確認する目的で、T-5～T-7の東西トレンチ3本を一直線に設定した。付近一帯の水田について土地の古老は、深田が多いため土墨の土を削取り、その土で整地したという。

各トレンチの幅は2mで、重機による掘下げを実施し、土層観察を行なった。T-5の長さは約20mで、土層々序は次のとおりである。



第7図 第5・6・7トレンチ南壁土層図 (1 / 80)

I層は、表土（耕作土）・床土で、厚さ20~30cmを測る。II層は黄色粘土層で、黒色土・茶褐色土の粒状のブロックを含んでおり、古老のいう土墨版築土による整地層とみられる。II層の厚さは3~5cmで、T-5の東半部では灰褐色土層を挟んで2枚認められる。また、II層の広がりは、少なくとも東T-7の東端まで、南はT-5の南方約100m付近まで達していることを確認した。III層は灰黄褐色粘土層で、IV層は砂質層と粘質土あるいは粘土層が交互に堆積したもので、以下地山である粗い砂層に達している。

地山直上の暗褐色粘土層は枝葉などの植物質を多量に含み、泥炭質である。IV層中から弥生土器が出土した。T-5の地山面のレベルはトレンチ東



第5・6・7トレンチ全影（東から）



第5トレンチ南壁（東から）



第5トレンチ南壁（西から）



第7トレンチ南型（西から）

端では表土下約50cmであるが、急激に1.5mの深さまで下降し、中央部付近でややレベルを上げ、平坦のままトレンチ西端に至っている。T-5西辺ではT-1の版築層は全く認められない。また、地山の上昇も認められない。地山レベルはT-5西端とT-1東端のそれがほぼ一致するので、T-5東端でみられた地山の上がりはT-5・T-1間(約9m)にはないまま連続するものとみられる。しかし、T-1の版築層(Ⅱ層)の東端はこの間に存在するとみられるが、おそらく現市道下であろう。

T-6はT-5の東方4mに設けたトレンチで、長さ約3mである。層序はT-5と基本的には同じであるが、地表下約2.5mまで掘下げたが、地山に達せず、湧水が激しく壁倒壊のおそれがあったため、深さ2m付近まで埋戻し、土層の観察を行なった。

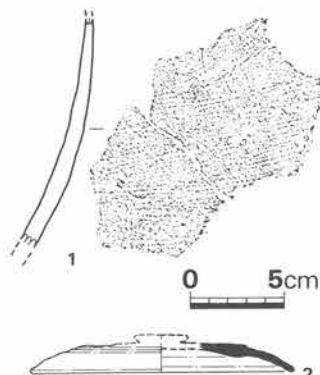
T-7はT-6の東3mに設定した東西トレンチで、長さ約14mを測る。層序は基本的にはT-5と同じである。地山面のレベルはトレンチ西端から4m東方付近で地表下約80cmであるが、トレンチ両端に向って下降する。

出土遺物

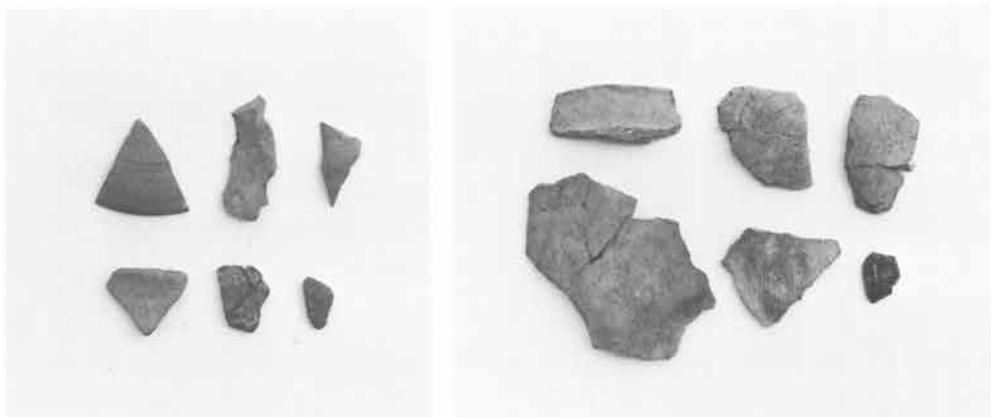
調査の結果、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・黒曜石剝片・サヌカイト剝片などが少量出土した。これらの遺物は版築層や氾濫層中に含まれていたものが大半で、少片かつ摩滅が著しい。

1は甕形土器の胴部で、内外面とも縦方向のハケ目をもつ。弥生時代後期の所産とみられる。T-5の地山(砂層)から出土。

2は須恵器杯蓋で、復元口径13.9cmを測る。内外面ともにナデが認められ、口縁端は丸味をもつ。奈良時代後半代の所産とみられる。T-2のV層出土。



第8図 遺物実測図

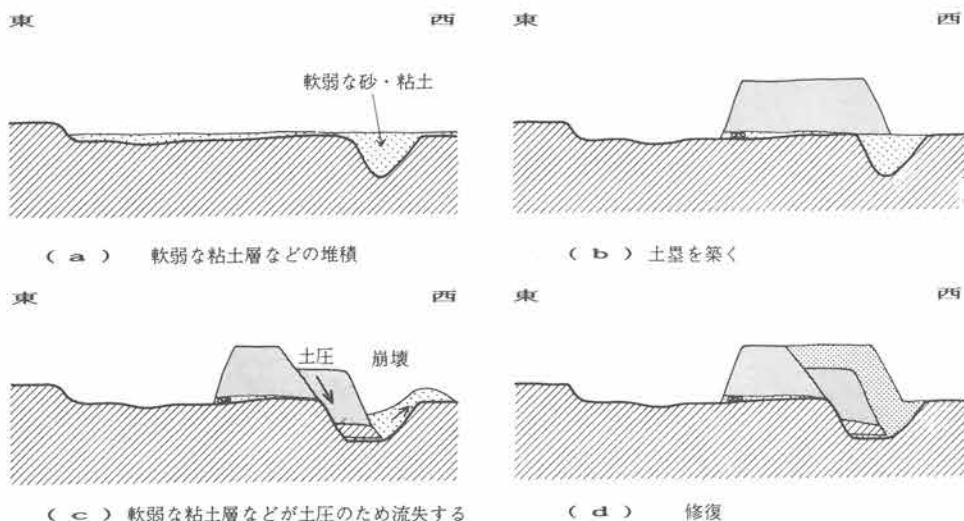


出土遺物(左、第1次調査 右、第2次調査)

IV. まとめ

二次にわたる発掘調査の結果、本遺跡は版築工法による土壘であることが明らかになった。以下、発掘調査の成果をまとめてみる。

1. 「古墓」と呼ばれる墓地であった土壘状の高まりは、自然地形の高まりではなく、版築工法による地業を伴う人工の盛土であることが明らかになった。
2. 土壘築造前の旧地形は上津荒木川の氾濫原で、窪地が湿地帯となって各所に存在していたとみられる。
3. T-1・本調査区の土層断面には不整合面が認められ、複雑な状況を示しているが、各トレンチ・調査区の土層々序を検討し、想像を逞しくすると次のような経緯を考えることができる。
 - a、上津荒木川が形成した氾濫原の窪地に砂・粘土などが堆積し、軟弱な基盤を形成する。
 - b、軟弱な土砂で埋った基盤の上に、地山成形もせず、自然木を倒し込む程度で、直接、版築工法による積土を行って土壘本体を築造する。
 - c、土壘本体の土圧のため、土壘下の窪地に堆積していた粘土などの柔軟な土が外部に流出し、並行して土壘本体の版築土が地山の一部と同時に窪地内へ滑り落ちてしまう。
 - d、崩壊した版築土を利用して再び版築工法による積土（IV層）を行ない、土壘本体を補修する。



土壘本体の一部が崩壊するCの段階は、IV層を覆う土層より須恵器杯蓋が出土していることからその下限は奈良時代後半頃とみられる。

4. 土壘の幅は、土壘の崩壊した経緯を考慮すると、西限はT-2と本調査区間の摺鉢状の窪地上にあり、また東限は本調査区とT-5間の市道上に求められ、およそ20m前後であったと推定される。

5. 土壘の東側に溜池があったという伝承をもとに、堀などの存在を想定して水田部の調査を実施したが、明確に堀といえる遺構は検出できなかった。しかし、土壘前面に幅約18mの堀状の窪地を検出しており、この窪地が自然地形であるものか、あるいは自然地形を利用してその一部に手を加えて堀状にしたものかは不明である。いずれにしても土壘前面（東側）に堀状の窪地が存在していたことは明らかである。

6. 土壘の築造年代は、版築層から遺物の出土が少なく、かつ小片であるため年代決定の確証を欠くが、版築層中から出土した土器の下限は古墳時代後期頃とみられ、一方、土壘本体の一部崩壊に伴う再積土を覆う層から奈良時代後半の須恵器杯蓋が出土していることから、およそ、7世紀代～8世紀後半頃とみられる。

次に発掘調査以外の方法で、上津土壘の築造年代・性格などについて考えてみたい。

古地図・航空写真・字寄せ図からみた上津土壘跡

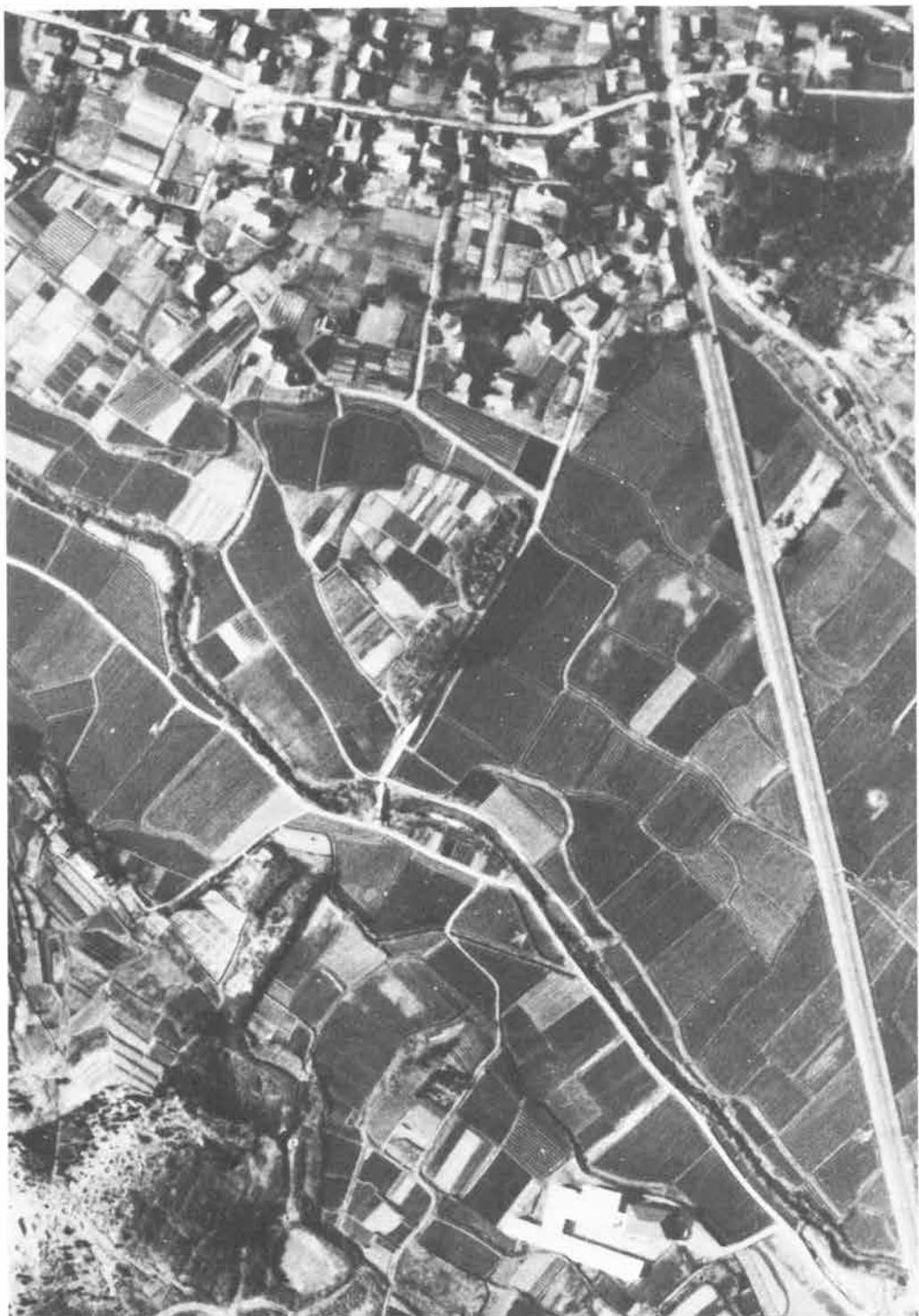
発掘調査により土壘の幅は約20mと推定されるに至ったが、長さ（南北長）はその大半が削平を受け、すっかり宅地化しているため不詳である。しかし、明治33年測量の大日本帝国陸地測量部地図「久留米」（1/2万）には三分割にはなっているものの、浦山丘陵の突端から南へ一列に連なる土壘の姿が記されている（第10図）。この地図によれば、北辺の土壘は上津荒木村役場、中央・南辺の土壘は墓地としてそれぞれ利用されている。規模は長さ450m・幅20～30mを測る。

また、昭和29年頃撮影の航空写真には北辺の土壘は宅地・畠として、また中央・南辺の土壘は墓地として利用されている土壘が写っている。地割りの流れからいざれの中斷部も河川の侵食によってなされた可能性が強い。この写真では、すでに北辺の土壘跡に高まりらしきものは認められないが、次の中央に位置する土壘との間を地元で「キレメ」と呼称しているのはその北側に同様な土壘が存在してはじめて「キレメ」と呼べるのである。

土壘の規模をみるのに有効な手段として字寄せ図がある。第11図は土壘跡一帯の字寄せ図で、



第10図 陸地測量部地図にみえる上津土壘跡
(明治33年測量)



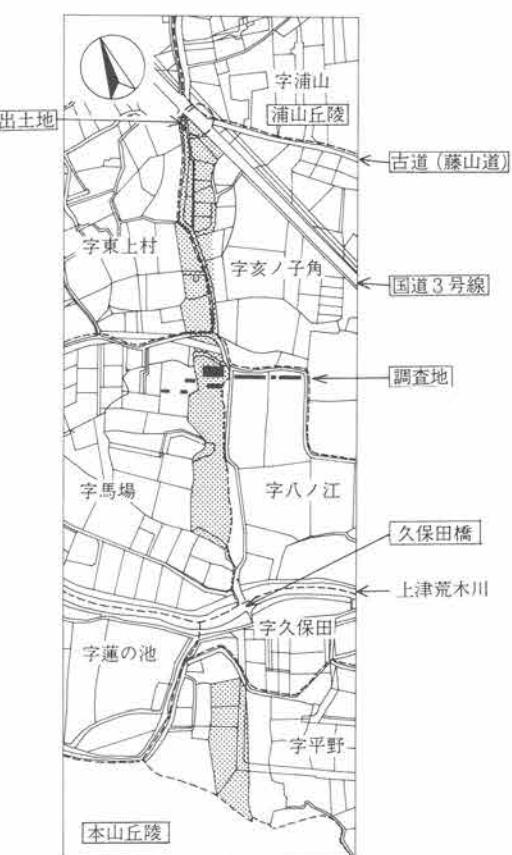
航空写真にみえる上津土墨跡（昭和29年頃撮影）

綱目の部分が航空写真などから推定される土墨の姿である。事実、上津荒木川以北の綱目の範囲では、民家の庭先などに版築層を認めることができ、一部は塚状をなして遺存している。

しかし、上津荒木川以南は丘陵部の地山成形によって土墨本体を削り出していたものとみられ、全く版築層などは認められない。

上津土墨跡と条里制地割り

上津土墨が設けられた上津荒木川流域には条理制地割りの名残とみられる一町方格の地割りが広がっており、また条里坪名なども認められる。上津荒木川一帯を行政地図(1/2500)で検討すると、土墨を境にしてその東・西では条里の方向性は同じであるのに対し、地割りの基準線に微妙な差を生じている。また、遺存する条里坪名から復元される条里界線も



第11図 上津土墨周辺字寄せ図（1 / 2400）

土墨を境としてそれぞれ異なる。こうした相違点は条理制施行に先だって土墨が存在していたために生じたと考えられる。この地域の条里施行の年代について文献・考古学両面からの史料はないが、1/2500行政地図や字寄せ図などの検討から次のように考える。土墨西方に展開する条里地割りの中を大宰府から筑後国府を経て肥後国府へ向う駅路が南下しているが、駅路と接する条里坪内に道路幅とみられる余剰帶を見出すことができない。また、駅路と条里界線が一致せず、条里界線の三町西方を南下する。つまり、駅路が条里制地割りの基準となっていない。一般に駅路が条里制施行に先行する場合、駅路が条里の基準線になる場合が多く、しかも、道路幅とみられる余剰帶が存在する。以上のことから土墨西方の条里は駅路開通に先行する可能性が非常に高い。この駅路については筑後国府跡一帯で発掘されており、少なくとも奈良時代には開通している。すなわち、上津一帯では駅路の開通に先だって条里制が施行され、さらに条里施行に先だって土墨が築造されていたという図式になる。



第12図 上津土塁跡と周辺の条里 (1 / 2.5万)

上津土塁跡と古道

上津土塁が接続する浦山丘陵の南辺には古道痕跡とみられる連続する小字・大字境界線（以下字界線と記す）が認められる。この古道痕跡は東方の甲塚古墳（帆立貝式前方後円墳）の西麓を南下し、「日本書紀」景行天皇紀にみえる「藤山」を経てさらに南下して八女丘陵を縦断し、矢部川に達している。途中、上妻郡衙跡推定地、筑紫君磐井の墳墓といわれる岩戸山古墳などがこの古道沿いに位置している。

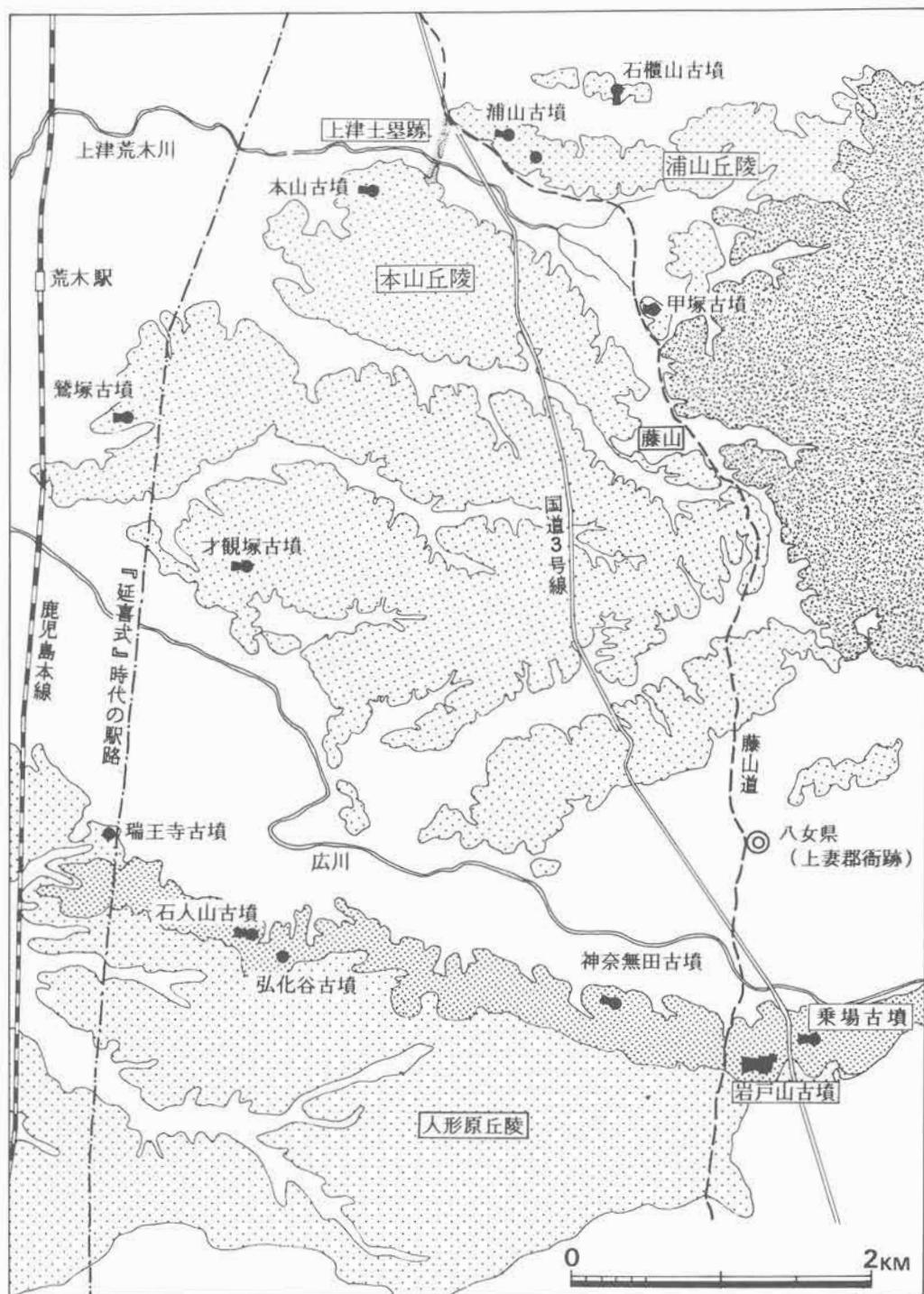
矢部川に達した古道痕跡とみられる字界線は山塊に沿って女山神籠石の西麓を南下する。そのまま地形に沿って西へ向うと高田を経て有明海とに面した黒崎へ達する。この古道痕跡は、「日本書紀」にみえる景行天皇の巡幸路と一致しており、また、この古道痕跡沿いに5～6世紀代の主要古墳が立地することから、律令時代以前駅路に先行する官道の可能性が強い。

上津土塁はこうした古い官道を塞ぐかのように位置している。かつて土塁北端と丘陵先端との接点で大石群が出土したという地点はまさにこの古道と土塁の交点でもある。

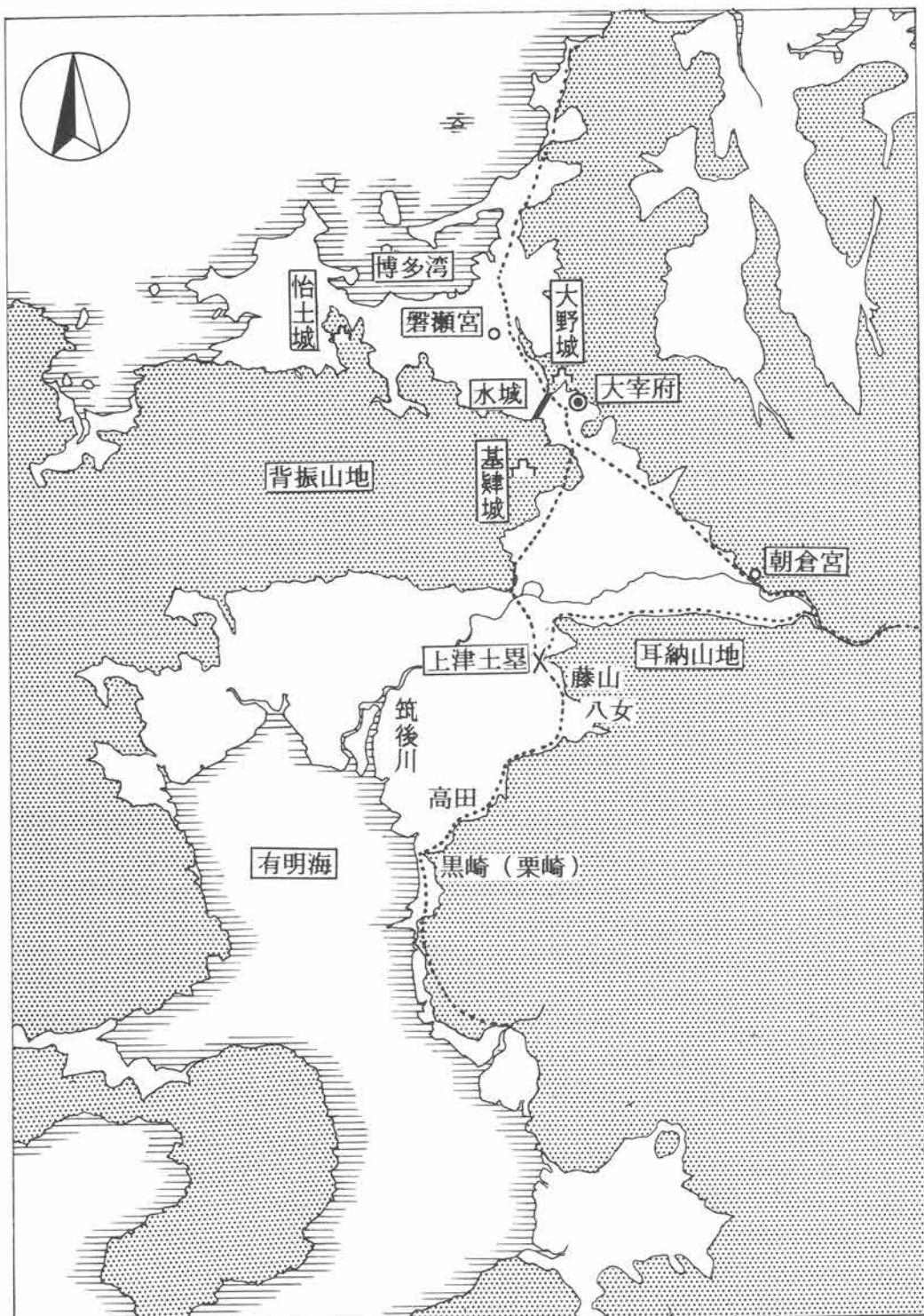
大宰府の水城跡においても駅路と水城との交点で門礎が検出されていることから、上津土塁における大石群は、あるいは門礎であった可能性が強い。

上津土塁跡と周辺地名

浦山丘陵の突端に接続する土塁東側一帯の小字名を「亥ノ子角」と称している。「亥ノ子角」すなわち北西の角という意味であり、この小字名がつく時にはすでに土塁が存在していたことが想定される。この小字名の成立年代について文献資料はないが、上津荒木川下流の荒木付近では現存する地名の9割がすでに中世荘園文書にみえることから、あるいは「亥ノ子角」という小字名も中世には成立していた可能性が強い。



第13図 上津土塁跡と藤山道



第14図 7世紀後半頃の北部九州

以上のことから上津土墨は、白村江の敗戦後、大宰府防衛のために設けられた水城の1つである可能性が強い。この場合、大宰府の背後、すなわち、有明海側からの侵攻に備えて築造されたものであろう。しかし、上津土墨はもう1つの機能を有していたのではないかとみられる。それは半島進出の前進基地的性格の強い磐瀬宮が博多湾を臨む地点に造営されたのに対し、朝倉宮は博多湾、有明海から遠く離れた、筑後平野の最奥部付近に造営されている。朝倉宮所在地については諸説あり、いずれも確証を得ないが、歴史地理学的立場から再検討した結果、筑後川を臨む朝倉町志波付近に想定したい。この朝倉の地は筑後川を遡り、豊後、瀬戸内を経て最短距離で大和に達することができる。つまり、朝倉宮はその位置からして万一の場合の退路を考慮して選地、造営されたものであろう。同じく、白村江の敗戦後、この退路の確保は一段と重要性を増したことが考えられるが、上津土墨は大宰府の退路を確保する使命も有していたものとみられる。

また、上津土墨の占地をみると、藤山道を八女方面へ南下した藤山付近の谷幅が100m以下であるにもかかわらず、この地を避けて丘陵地帯から平野部へ移る地点、すなわち最も谷幅が広い谷口に築造されている。こうした背景には、有明方面から進攻する外敵を阻止する目的で上津土墨が築造される際、大宰府側では朝倉宮の事件や、5世紀前半、半島勢力と結んで朝廷側と戦った筑紫君磐井の乱を考慮して、当時なお筑紫君の末裔が住む八女の地を避け、八女の地を土墨の外側において築造せざるを得なかったものとみられる。つまり、上津土墨はある意味では内乱に備えるという性格を持っていたのかも知れない。



現存する土墨の高まり（東から）

上津土墨跡

昭和 61 年 3 月 31 日

発行 久留米市教育委員会
久留米市城南町15-3

印刷 (有) 猪飼プリント
久留米市東和町6-18

